



2012.6.1

6月 ちとせだより

神戸 YMCA ちとせ幼稚園

日米の親の子どもに対する「こんな子になってほしい」という期待には大きな違いがあると言われてい
ます。特に、「他人の前でちゃんと自己主張できるような人間になってほしい」という項目では、米国の母親
は得点が高く、日本の母親は最も得点が低いという結果があるそうです。つまり日本の母親は我が子が自己
主張するよりも、周囲に適應することを期待している傾向が強いようです。しかし、親がみんなに合わせて
はみ出さないようにと願い、子どもにそれを求めることは、子ども自身が自らの意志を持つことを否定する
ことにもなりかねず、結果的には親の願う人生を歩むことを強いているのと同じことになるかも知れません。
もちろん、何でも自己主張することが良いことで、みんなに合わせるものがすべて悪いことでは決してなく、
その双方を場面によってバランスよく判断出来るようになることが大切です。また、自立と依存も決して人
間にとっては対立する概念ではありません。他の人に依存しないで生きている人は社会生活そのものを営ん
でいない人であり、それは依存していないのではなく孤立しているとも言えるでしょう。人間は他の人に依
存しなければ社会生活を営めないことを理解し、かつ個人として自立していなければいけないということだ
しょう。

鯨岡 峻氏（京都大学名誉教授）は、「両義性の発達心理学」の中で次のように述べています。
「子ども自身が、自分の意志を持ち、『自分はどうしたい』『こうしてほしい』という気持ちを表現するこ
と、表現できるようになることは、大切な成長です。また、同年代の子どもとの出会いの中で、人間そのも
のに対する興味も深まり、『自分も一緒にいたい』『一緒にしたい』という気持ちも芽生えてきます。しか
し、自分の気持ちを表現することは、自分勝手な振る舞いに繋がりがねず、『みんなと一緒に』という気持
ちを実現するときの関わり方とは、相容れない場合もあるわけです。また逆に、『みんなと一緒に』を求め
るときには、みんなに合わせることに気を使い、自分の気持ちを引っ込めざるを得ないということにもなりか
ねません。このような自己矛盾を持ち、あえてその二面性をバランス良く充実させていくことこそ、一個の
主体として生きるということの意味であり、そのどちらかに傾斜することは、望ましい主体としてのあり方
ではないわけです。」

現代社会では、か×、正解か間違いかを瞬時に判断することが、望ましいこととしてとらえがちですが、
人間が生きていくということは、そのようなデジタル的な思考ではなく、自分と他者、自立と依存といった
場合によっては相反する双方を柔軟に受け入れていく価値観が必要です。そして、その様な価値観は実際の
人間関係を豊かに経験することなくしては、決して身につくものではありません。

子どもたちが、幼少期だからこそ経験できる、そしてある意味正直であるからこそ残酷な子ども同士の人
間関係を経験しておくことの大切さを忘れないでいたいと思います。

年主題 「あふれる愛 小さきものとともに」

6月主題 「動き出す」

聖句 “「わたしに従いなさい」と言われた。”（マルコによる福音書2章14節）